
エクラス～時空の転移者と冥王の倒滅～

神威メルブラ勢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エクラスく時空の転移者と冥王の倒滅く

【Nコード】

N9305E

【作者名】

神威メルブラ勢

【あらすじ】

とある学校の少年A、そう自身の立場を理解して（思い込んで）生活している青年がいた。ある日屋上で昼寝をしていると恐喝に逢うクラスメイトが！少年Aの頭に声が響き、力を手に入れた時、少年Aの大冒険が始まる！！！！異世界トリップモノです。

プロローグ（前書き）

何故かわからないんですがはじめ11話程度までシリアス風味に仕上がってしまいました・・・。

今後コメディにする予定ですのであしからず・・・。

プロローグ

）プロローグ（

「♪~~~~♪」

鳥達の心地よい鳴き声が響く。

木々はわずかに揺れ、緩やかな流れに誘われ……。

窓からの太陽の光が、この部屋の雰囲気はどこかやわらかなものに醸し出しているのだった……。

夏休みが終わり9月、いまだ夏休み気分が抜けないクラスメイトたち。

そこには1人ウトウトと机に突っ伏し、眠っている少年の姿があった。

「――――」

何処からとも無く、この雰囲気をぶち壊すであろう声が聞えている。

否、ぶち壊す男の声である。

「ううん……。」

眠そうに目を擦りながらその少年はマヌケなうめき声を上げた。

その姿を眺めながら肩を震わせている男が一人……。

「龍・崎・君！私の授業中に眠るとはいい度胸してますね……。」

……ちなみにここは私立陽青高等学校，1年4組の教室である……。

私立陽青高等学校，元商業高校であり，100年もの歴史を持つ祐所正しき学校である。

とはいえ，回りには住宅地が広がり，歩いて5分もすれば駅が見えてくるという普通の高校と大して違いは無いのであるが……。

少し異なるところは，この高校の文化祭，通称『妖精祭』は高校だけでなく，商店街などの周辺をも巻き込んだ一大イベントとなっていることだろう。

「っわ，先生！すみません！ついウトウトと……。」

こういうとき当然のように友人達は見て見ぬ振りである。

そしてその判断は絶対的に正しい。

嘆かわしいことではあるのだが……。

ちなみにこの少年，龍崎 翔（りゅうざき しょう）という。

スツと伸びる眉、目は黒と言うよりも漆黒、肩まで伸びた髪は後ろで無造作に纏めている。

俗に言う美男子と言うやつである。

しかし何処にでもいる美男子と言うわけではない、この少年只者ならぬ雰囲気醸し出している、・・・のだが、残念ながら本人にその自覚はない。

いつも寝ている割に学力は上の上を維持し続けている。

授業中に昼寝をすることを何よりの至福とする、少し変わった少年でもあった。

「・・・後で職員室まできなさい。」

先生と呼ばれた中年の男はあきれたようにこう言い放った。

ここまでの説明を聞いているとこの教師が無能であるかのように聞えるかもしれないが、そのようなことは無く、腕利きと評判で生徒達からの支持も熱い模範とも言うべき教師である。

普通の生徒には注意して終わりであるはずだった・・・のだが、さすがに連続10回も自分の授業で寝られてはそうも言ってられないようである。

「せ、先生、それだけは勘弁してください・・・、寝る時間が・・・。」

性懲りも無く翔はこの教師にとっての禁句を言っただけで済んだ。

クラスメイトたちに緊張が走る、翔の周辺の生徒はその逆の方へ身体をそむけ、それ以外の生徒は我関せずというように顔を背ける。

バン！

クラスメイトたちが弾かれたかのように翔と教師のほうへ振り向いた。

（・・・なんだ、この教師。テストでいい結果を残してんだからいいじゃねえか。）

翔は思う。

それが顔に出たのかは定かではないが、教師の顔が照れでは無く、憤怒で赤く染まっていった。

翔は本当に理由が分からないと言ったように顔を傾げる。

（いつもは「テストでいい結果を出せ！」と言ってるくせに、いい結果を出している者には「人の話をしっかりと聞いていなさい。」と言う、一体なんだってんだ）

理解する必要のみにしか興味の無かった翔にこの教師の気持ちが分かるわけが無かったのである。

「龍崎君！君は私を馬鹿にしているんですか！」

教師の方もこの生徒の優秀さを理解していたので、下手に手出しするわけには行かなかったのである。

そしてその状態のまま授業が終わるのが常だったため、クラスメイトたちは今までになかったこの状況に面食らっていた。

・・・そこへ

キンコンカンコン、キンコン~~~~

チャイムが鳴り響いた。

（ふんっ、これ以上は無意味だな・・・。）

無言で翔が立ち上がり、無言で廊下へと歩いていった。

残された教師はというと、まさか翔がここまで完全に自分のことを無視するとは夢にも思っていなかったようで、怒鳴った体勢のまま固まっていた。

「センサー、授業早く終わってくれませんかー。」

と言う言葉が聞えるまでずっとそのままだった。

ちなみにこの声が掛かるまで5分間の時間が必要だったとか。

この教師はこの1年4組の生徒達からの評価を落とすこととなったのは又別の話である。

・
・
・
・

・
所かわって屋上・・・（学校の）

「ふう～～～～。」

1人屋上へ来た翔は、いきなり大きなため息をつく事で自分の感情を静めようとしていた。

（疲れたああ～～～～，なんなんだよあの教師！全く，俺の至福の時をよくも～～～～！）

しかし，湧き出すのは先程の出来事。

全く正常になど成れるはずが無かった・・・。

木枯らしの吹く中翔は屋上入り口の上，即ち屋上唯一の建物の上に腰掛けながら1人，誰に言うことも無く愚痴をこぼしていた・・・。

『ふむ，確かな・・・』

「！！！！」

何処からとも無く，雷の轟のような声があたりに響いた。

実際は翔の心に直接伝達されただけなので回りには聞えていないのだが・・・。

「だっ，誰だ！」

翔のこの反応は正しいものだと言えるだろう。

何処からとも無く知らぬ、しかも地から響くような声が聞えてきたら誰でも同じ反応を示していただろう……。

翔は身構えたが、その声の主は無言のままだった……、そのとき、

「やっ、やめてください!」

「おいお前、金持ってるんだろ、出せよ(笑)」

「い、いやです!何で渡さないといけないんですか!」

「今渡しとけば痛い目にあわなくても済むぜ(笑)」

「そうそう、身体に教えるしかないもんなあ、口で言っても分からないんならさ。」

どうやら女子生徒が不良生徒に恐喝されているようだった……。

(うん?あれは確かうちのクラスの……。前明良が言ってた奴じやないか。なかなか可愛い顔してるって聞いたけど、確かにこれなら頷けるな、確か名前は……。井上, だったかな。)

この井上にとって絶体絶命のピンチに、翔は暢気にそんなことを考えていた……。そこへ……。

『助けないのか?』

「!?!」

翔は、声を立てないようにしながら極力小さな声でこういった。

「だ、誰なんだ……。」

『君の腕輪の宝玉とでも言えば分かるか？』

そして私は第零級魔導具，【聖剣と魔剣】である。』

正直な所翔には何のことかさっぱり分からなかった。

魔導具？聖剣と魔剣？大体この腕輪は親父に貰った物なのにどうしてそんなものが入ってるんだ？などなど、疑問はあったが、

『それよりも、助けなくとも良いのか？』

この一言で質問をするタイミングを失ってしまった……。

翔はその腕輪を手にとって見たが特に変わった所があるようには思えなかった。

「そんなこと言ったって、俺が行ったってどうせやられるだけだよ。怪我するだけ損だしな……。」

知らず知らずのうちに本音が翔の口から漏れ始めた。

『そんなことは問題ではない……，助けるのかそれとも助けないか。』

「……」

（俺は、どうしたいんだ？助けたい？でもいまだこうやっているじゃないか、どうなってもいいと思っているからじゃないのか？）

翔の中で葛藤が始まる。

そこへ・・・

『時間が無い、どうするかは自分で決めるがいい・・・。』

（！！！そうだ！助けたいんじゃない！・・・，助けるんだああ！）

翔が心の葛藤に打ち勝った時，

『それでこそ我らが選んだ主として相応しい・・・，心配するな，力は我が与えよう・・・，宝玉に触れながらこう唱えるがよい，『強化』と』

腕輪の宝玉がこう言った。

「・・・『強化』」

翔が言われるがままそう言った瞬間，翔の身体を何かが包むような感覚を感じた。

これが『強化』の第1段階，身体能力の強化である。

「す，凄い！」

「目的を果たすが良い・・・。」

翔はその言葉を聞くと一陣の疾風となり、恐喝をしている2人の不良の目の前に現れた。

「!!!」

「大丈夫か？、井上。……恐喝とはなかなか卑怯なこととしてますね、先輩。後輩の女子生徒にそれは無いんじゃないですか？大体、か弱い女子生徒相手に男が2人なんて情けない……。」

「ッだ、ッ誰だ、貴様は！」

『井上』と呼ばれた女子生徒は驚き立ちすくみ、恐喝を行っていた男子生徒達は敵意と畏怖の念を抱いていた……。

「そんなことはどうでもいいんです。その娘を放して去るか、ここで俺に潰されるか、好きな方を選ばせてあげます。」

なぜか丁寧口調な翔は、そういうながらさりげなく『井上 葵』を庇うように自分の後ろへと従えた。

「きつ、貴様あああ！」

「俺達の邪魔をするなあああ！」

不良たちはあの程度の挑発に易々と乗り、翔へと殴りかかってきた。それを翔は易々と（素人が見れば紙一重で）避けながら

（……何故俺はここまで落ち着いているんだろう……？）

自分の心境に小さな戸惑いを覚えた。

だがすぐにその考えを振り払い、

「やれやれ……、これだから頭の悪い奴は嫌なんだよ……、か

「かってこい、この右手だけで貴様らの相手をしてやろう……」

翔は追い討ちのようにこう言い放った。

! ! ! ! !

「死にさせえええ！！！」

不良たちは翔に向かってそれぞれが我武者羅に殴りかかってきた。

不良Aが翔の顔面を狙いながらすばやくパンチを繰り出す！

翔はそれを上体を捻るだけで交しカウンターで後頭部へ刀のような鋭い手刀を叩き込んだ。

「ガッ、ガハッ！」

それだけで不良Aは冷たいコンクリートを舐めることとなったのである。

それを見た不良Bが懷からナイフを取りだし逆手に構えながら翔と対峙する。

不良Bの持つナイフは少し反った刃をしており、斬るよりも刺すことに特化したものだった。（まあ、ナイフと言うものはそういうものだが・・・。）

※（俗に言うククリナイフである）

この不良B，不良Aと違い場慣れしているようだった・・・。

（まあ、だからって負ける要素は無いけどな・・・。）

翔が そう思った瞬間、

「ウオオオオ！」

不良Bが翔に向かって突撃してきた。

おそらくこのときの不良Bの頭の中ではエンドルフィンが大量に放出されていることだろう……。

不良Bが必殺を確信して繰り出した刺突はしかし翔にとどくことは無かった。

代わりと言ってはなんだが不良Bの持っていたナイフは翔によって蹴り飛ばされ、刃先は折れ、使い物にならなくなっていた。

そして翔はその反動で地を蹴り、不良Bの鳩尾に掌底を打ち込み、浮いた身体に自分の身体に流れる気（魔力や存在の力とも言う）を練った上段蹴りを繰り出した。

上段蹴りは翔の思った通りの軌道を描き不良Bの鎖骨に直撃した。

ビギッ！

不良Bの鎖骨辺りから鈍い、それでいて乾いたような音が聞え、

「ぐわあああ！」

それに続いて不良Bの悲鳴が屋上に轟いた……。

もともとケンカなれしている翔、ましてや例の双剣の力まで使われればこの不良たちが勝つ道理は無かったのである。

「さて、と、終わったか。」

そういうと翔は何事も無かったかのように去っていった……。

【～葵side～】

（まったく……。なぜこんな時にかまれてしまうんでしょう……。大切な用事があったというのに……。そう、龍崎君に……。

）

この心の声は 井上 葵 のものである。

こうきくと落ち着いているように思うかもしれないが、実際は大ピンチなのであった。

「おいおい、きいてんのかあ？」

「そうだそうだ、さっさと金出した方が身のためだぜい。」

そう言ったのは軽そうでガラの悪そうな（ついでに頭も悪そうな）男が2人目前に立ちはだかつていた・・・。

と言ってもそこまで背の高い男だったのだが、あいにく葵自体が身長の低かったのでこの表現がしっくりくるようである。

「おおーい？」

そういいながら不良たちはゆっくりとしかし逃げ道を作らないように近づき、葵の肩に手を置おいた。

「やっ、やめてください！」

「おいお前、金持ってるんだろ、出せよ（笑）」

不良Aが楽しげに言う。

実際この男たちの中に罪悪感というものはほとんど無いだろう・・・。

小遣い稼ぎという理由で強盗という犯罪を見ない振りしているのである・・・。

「い、いやです！何で渡さないといけないんですか！」

葵は抵抗しようとするがそこはやはり男と女、限度がある。

（さすがに危ないかも……。こんな時に1人だなんて……。）

いまさら嘆いても後の祭りなのだが思わずにはいられない葵なのだった……。

「今渡しとけば痛い目にあわなくても済むぜ（笑）」

「そうそう、身体に教えるしかないもんなあ、口で言っても分からないんならさ。」

2人はさらに愉快そうに笑いながら迫ってきた、そこへ……

「恐喝とはなかなか卑怯なことしてますね、先輩。後輩の女子生徒にそれは無いんじゃないですか？ 大体、か弱い女子生徒相手に男が2人なんて情けない……。」

何処からとも無く翔の、葵の想い人の声が聞えてきた……。

（！！！！うっ、嘘っ！！！！この声は！）

「~~~~~」

「~~~~~」

「~~~~~」

「~~~~~」

翔たちが何か言い争いをしているようだったが葵の意識は別の所へいつてしまっていたようで全く頭の中に入っていない。

（なっ、なんで龍崎君が・・・？いつ、今の聞かれてた？どっ、どうしようっ！）

バキッ！

ボコッ！

「グワァァ・・・」

遠くで何かの叫び声のようなものがきこえ我に返った。

そこには2人の不良たちが地べたにへばりつき、それに目もくれず去っていく翔の姿があった・・・。

【本ルート】

（まったく・・・。面倒なことしちゃったなあ・・・。まあ、人を助けて悪い気持ちはしないけど。）

と、翔が自己満足に浸っていると・・・

「りゅ、龍崎くん・・・、あのっ、さ、さっきはありがとう・・・。

」

横にはあの不良に絡まれていた同級生、正確には 井上 葵の姿があった。

「うん？ああ、気にしないでいいよ。でも気をつけなよ、貴女みたいに可愛いと狙われやすいんだろうね♪」

まったく暢気にそんなことを言う翔だった・・・が。

「なあゝに言ってるんだよ、翔。」

「ああ、明良か、なんだよ。」

いきなり声を掛けて来たのは 夏目 明良 翔の親友にしてライバルである。

「まったく、部活にも出ないで何をやってるのかと思えば、ナンパですか翔くん？」

（！！！なっ、なにをっ！！）

予断だがこの反応は葵である。

「バーカ、そんなんじゃないよ。」

翔は軽く受け流す。

「じゃ、俺は行くわ！あんまり井上さんを困らせるなよ、翔！」

そういうながら、明良は道場のほうへと走っていった……。

「まったく……、大きなお世話だってーの、で？なんだっけ？」

翔は話を戻そうと葵へと向き直ったが、

「かつ、可愛いなんてっ！な、ナンパだったの？そんな馬鹿な。」

本人は心の中で思っているつもりなのだろうが、しっかりと声に出していた……。

「・・・おい、井上さくん？だいじょうぶかい？」

「あつ、はいっ！大丈夫ですすっ！」

「っぷ、面白いね、井上さんって。」

「そっそんなこと無いですよ！あつ、そうだ、立ち話もなんですか歩きませんかっ？」

立ち話はダメで歩けばいいなんてかなりむちゃくちゃな理論である。

「アハハハ、やっぱりおもしろい。」

そういうながら学校を後にする翔たちだった・・・。

・ ・ ・

場所は変わって井上宅前・・・。

「あつ、そうだ、上がっていきませんか？お茶ぐらいは出せますよ？」

やっと積極的になりだした彼女を珍しげにみやると、

「やっぱり変わってるね、普通簡単に男を家に入れないはずなんだけど？」

翔の言うことは最もである、2人は高校生、間違えが起こってもな

んらおかしくない（？）状況なのである。

「そ、そうでしょうか？／＼／＼／」

と葵が言った瞬間、

『何かが来る・・・、気をつけろ・・・。』

何処からとも無く雷鳴のような声が頭に響く・・・。

「！！！！井上！伏せろ！！！！」

そう翔が言った瞬間、

カッ！！！！

目の前の空に閃光が走る！

2人はまぶしさのあまり目をつぶり地べたに伏せたのだった。

否、実際は2人の姿が消えていったので、2人の意識では、であるが。

その閃光がやんだ時、2人の姿は何処にも無かった・・・。

第1話 『目が覚めたらそこは異世界だった!?!』

第1話 『目が覚めたらそこは異世界だった?!?!』

チュンチュン、チュンチュン

コケコツコーツ!

鳥達のさえずり、鶏の鳴き声が響く中、翔はベットの感覚のなか目を覚ました。

窓からは光が差し込み、幻想的な情景を浮かび上がらせているのだが、残念ながら翔はそこまで繊細な感性を持っていなかったようである……。

「うーん……、ここは……?」

眠そうな目を擦りながら翔は辺りを見回す。

目の前にはゲームに出てきそうな本棚、ダンス、ベットが置かれたこじんまりとした部屋だった。

「うーん、こういう部屋も悪くないなあ……。」

翔は寝ぼけているのかそんな的外れなことを言いながら起き上がった。

そのまま階段を降り、居間へ入っていった……。

・

・
・
「あつ、おきましたか、おはようございます。」

翔を出迎えたのは同い年ぐらいの少女、髪は金髪、目は青という人目で外人と分かる容貌をしていた。

「ああ、おはよう。……ってちょっと待て、君は誰だ、そしてここはどこだ？」

やっと頭が動きだしたのか、もっともな疑問を口にする。

「ああ、ここはポーン村ですよ。貴方はこの近くの森に倒れていたんです。」

「ポーン？ 森？ 倒れてた？ どういうことだ？」

翔は意味が分からないというように首をかしげた。

「だから、そのままの意味ですよ。」

金髪少女は『何を言ってるんだ？』とでも言うかのように言った。

「ちょっと待ってくれよ、ここは陽青市じゃないのか？」

「????? 何です、その陽青市って？」

「だから、陽青市だよ、陽青市！」

「だからなんですか、その陽青市って？」

「・・・」

（陽青市を知らない？ 大体俺もポーン村なんて知らないな・・・。）

「なあポーン村なんて俺は知らない、いったいここは何処なんだ？」

「・・・寝ぼけているんですか？ 顔でも洗って着たらどうです？」

そういわれて翔は質問の答えを得ることは出来ず、洗面所へと送り出されていった・・・。

・
・
・

翔が戻ると、

「お腹すいてるでしょう？ ご飯にしましょう。」

といいながら金髪少女は料理を机の上へと並べていった・・・。

「ってそうじゃなくてさ、何で俺がここに居るんだ？」

翔としては当然の疑問を投げかけた。

「知りませんよ、私は森で倒れてた貴方を助けて、ここまでつれてきたんです、お礼の一つでもないんですか？」

少し怒気を含んだ少女の声に、

「そうか、それはすまなかった、ありがとう。ってちょっと待て、

俺が倒れてただって？」

「そうですよ、森で倒れてたんです。」

当然のように言い切る少女にさすがの翔も異常に気がついたようだ。翔の頭の中はいますぐい速度で回転していることだろう・・・。

（どういうことだ？確か葵とか言う奴を助けて、それから・・・，そうだ，光に包まれたんだ，それで，ここに？，この少女の言うことからして俺のいた世界じゃないと考えるほうが妥当だな。ってことは何らかの力でこっちの世界に飛ばされたってことか？）
翔が考え事に耽っていると，

「あのー，ちょっといいですか？」

と少女が話しかけてきた。

「何だ？」

と短く翔は言い放つ，が，少女は動じることも無く，翔にとっては自分の理論を打ち砕く言葉を言い放った。

「この家任せていいですか？私は魔法の練習に行つて来ますから。」

「！！！！，なんだって！魔法！そんなものがあるのか！？」

「何言ってるんですか？そんなこと珍しくないでしょう？」

翔のいた世界ではそんなものあくまでゲームや漫画の世界だったのである，そんなものが突然あるといわれても納得できないのが当然である。

「……じゃあ、俺にその魔法とやらを見せてくれ。」

「いいですけど私は回復魔法しか出来ないよ？」

「いいさ、見せてくれ。」

「ううん……，まあいつか。」

そう少女はいうとなにやら呟きだした。
指も小刻みに震えている。

どうやら紋章を描いているようだった……。

「
 ）、
 ）、
 ）、
 ）、
 ）、
 ヒール！！！！」

そう少女が言う。と翔の周りに青白い光のようなものが発生し翔の身体を包み込んだ。

「どうです？」

少女は自信満々にそうに言った。

実際、このレベルの魔法を使う為には5年は修行が必要なのである。

「うっ、これは・・・。」

「だからあるって言ったでしょ。」

翔が呆然としているとそこに

（予想よりもこの世界に転移されるのが早かったようだな・・・。）

翔の頭の中に声が聞えてきた……。

（お、お前は……、聖剣と魔剣……。）

（呼びずらいだろう、「光華」と読んでもらっていいわよ）

突然女の声が聞えてきたので翔は驚いた、が

（驚いているようね……、でもこれが本当の私よ？ 今までののは表の口調と声だっただけ。）

（……そうか）

まだ納得していない翔だったがこれ以上長引かせるわけには行かない、と思いとりあえず納得することにした。

（で？ここは何処なんだ？）

最も気になっていたことを翔はこの「光華」に聞いた。

（異世界よ、特に名前なんか無い、でも私達、導具の中に眠る力の存在たちは「エクラス」と呼んでたわ）

（そういえば井上は？）

（……残念だけどこつちの世界に来てるはずよ、ただ何処に飛んだのかはちょっと……。）

（さっきの早かったって言うのは？）

（ああ、それは貴方がこの世界に来ることは決まっていたのよ、シンから私を貰ったあの時からね）

（・・・いったいどういうことだ？）

（簡単なことでしょ？貴方達一族は魔導具を受け継いできた、そしてシンが魔導具を初めて呼応させてから私が生まれた、まあ、正確には私が呼ばれた、のほう为正しいんだけどね。）

（・・・じゃあ、親父は死んだのか？）

（ああ、心配しないで、シンの意思で貴方に私が渡されたんだから。）

（何故親父がこの世界のことを知っている？）

（20年ほど前、『エクラス』の人間が世界的な実験を行ったの、その呪文はまだ未完成だった『アナザーチェンジ』、俗に言う空間転移だったのよ・・・。シンはその実験に巻き込まれて『エクラス』に来てしまったのよ。そして私と出会い、その呪文を完成させ、元の世界に戻ったのよ。）

（・・・なるほど、じゃあ戻る方法があるんだな？）

（ええ、あるにはあるけど今の時代にまだ記録が残ってるとは限らないわよ。）

（どうすればそれを調べられる？）

(そこに居る少女にでも聞いてみたらどう?)

(・・・そうするか。)

光華のどこか嬉しそうな声を翔へと送りながらそう言った。

翔は釈然としないまま、しかし言われた通りに目の前に座っている少女へと視線を送った。

少女は翔が考え込んでいる姿を見て当惑しているようだった・・・。

「なあ、ちよつといいか？」

このままでは進展がないと踏んだ翔は少女へと声をかけ、

「君、『空間転移』の魔法って使える？」

「・・・は？空間転移？そんなの使えるわけ無いでしょうがっ！」

ものすごい勢いで反応した少女をみて一瞬驚いた翔だったが、

「・・・そうか、残念だ・・・。」

「だって空間転移は第零級魔導具がないと発動することが出来ないんだよ？管理局の最高責任者しか持ってないんだから無理に決まってるじゃない！」

「魔導具、か。君も持ってるのか？」

「持ってるわよ、でも第三級だし、私のは『効銃』だもん、戦闘用よ。」

「『効銃』っていうのは？」

「色々な現象を生み出す弾丸を打ち出す銃のことよ、青龍士程度の力しか発動できないけど……。」

「なるほど。第三級、ね。」

（確かにそんなことも出来そうだよな、『光華』みたいな力ならさ。）

（あら、失礼しちゃうわね、私も第零級なんだからっ！）

（なんだって？じゃあ空間転移呪文も使えるのか？）

（あはは、実は使えたりして……）

（……先に言ってくれよ……。）

まったく、人騒がせな魔導具だった……。

（まあ、いいじゃない、今すぐ帰るわけにはいかないでしょ？）

（そうだな……、葵を探さないと……。）

（まあ、何かあったら力を貸してあげるから言いなさいよ？）

（ああ、頼りにしてるよ。）

翔はそういと光華との会話？を終わらせた。

「で、その『効銃』っていうの見せてくれないか？」

翔がそう言うと、

「ううーん、いいけどこの町の人には内緒にしててね。」

「うん？ ああ、分かった。」

実際翔は何のことか全く分かっていなかったがそういうと、

「じゃあ出しますね、『効銃』出てきて。」

そういった瞬間翔の半分ぐらいの少女の手に銀色の拳銃が握られ、輝いていた。

「ふうーん、すごいな。一回撃って見せてよ。」

「危ないですよ、ここで撃ったら。」

「じゃあ、俺が倒れてたっていう森に行こう。」

そう翔は言うと言引に少女を外へと連れて行った……。

・ ・ ・ ・ ・

場所は変わってポーン村付近の森……

「もう、離してください、いきなりなんなんですか！」

無理やり連れ出した翔に少女は怒りを隠しきれないようだった、が、

「ごめんごめん、すまなかったって、でもどれほどの威力があるか知りたいじゃないか。」

翔は全く悪気を感じていないような（実際全く感じていないのだが）口調でそういった。

今翔たちの居る森は年中草木に覆われ、太陽の光ですらまともに入らないような所だった。

「迷いの森」、と言う言葉がしっくりくる、そんな空間での会話はその空間での恐怖を紛らわせる為のようにも思えた。

「もうっ、仕方が無いですね。でも魔導具の効果って魔法と違ってそう簡単に見れるものじゃないんですよ？」

「、そうなのか？全く知らなかった・・・。」

予期せぬ返答に翔は一瞬驚いたが、

「じゃあ、見れる俺は幸運なんだな。」

「・・・はあ、まあいいですよ、危ないですから離れて下さい。」

少女は翔の言動に少し困った顔をしたがすぐに気を取り直してこういった。

「おうっ，わかったぞ。」

珍しく翔も大人しく言うことを聞き，少女の少し後ろに下がった。

「じゃあ，何を出して欲しいですか？私の魔導具はまだあまりレベルが高くないので4大元素程度しか使えないんですけどね。」

4大元素とは火・水・土・風のことを指し，初級魔法に多い元素である。

・・・まあ，その理由が元素自体を呼び出しやすいことにあるのだが，残念ながら理由までは説明されていないようだった。

「4大元素って？」

残念ながらナレーションは翔には聞えないのもう一度説明せねばならないだろう，まったく，二度手間である。

「ううーんとね，要するに火・水・土・風のことですよ，それぞれ能力が違うんです。」

少女の説明を聞き，しかし尚理解に苦しむような顔で翔はこう言った。

「ふうーん，良く分からないが，とりあえず何かやってくれよ。」

せっかくの少女の説明だったが，翔には理解できなかったようだ。

少女は苦笑しながら，

「そうですね、じゃあ、火は危ないので土でいましょか。」

そう少女は言いながら第3級魔導具『効銃』の引き金に指をそえると、一気に3回引き金を引いた。

効銃から吐き出された、エネルギーは銃身の向けられていた大木にたて続けに命中した。

「なっ!!!」

翔が驚くのも無理は無い、そのエネルギーが大木に命中した瞬間、破壊されると思っていたそれは急成長を開始した。

その成長が止まった頃には、この森で1番高い所まで成長していたのだった。

「こ、これはすごい!なるほどこんなことまで出来るのか!」

翔は興奮気味にこういったが、

「ツク、ゴホツ・・・。」

少女が苦しそうに咳き込み、前のめりに倒れていた・・・。

「お、おい!大丈夫か?」

翔は何とか少女と地面の間に身体を滑り込ませた。

少女を見るとなにやら拾う困憊しているようだった・・・。

「いったい何があったってんだよっ！」

（とりあえず家に運んだほうがいいわね。）

光華にそういわれ何があったのか分からないながらも、翔の行動は速かった。

少女を背負い、少女が落とした『効銃』を拾いながら、

（いったい何だってんだ・・・。）

と心のなかで愚痴をこぼすのだった・・・。

第1・5話 『現象と代償』

第1・5話 『現象と代償』

少女が森で倒れて1時間後・・・

少女はベットの上で規則的な寝息を立て、翔はその部屋の真下に位置する居間で光華と話をしていた。

（なあ、何で倒れたんだ？）

（ん？ああ、そういえば話してなかったっけ。）

（何のことだよ？）

（魔法はね、魔法力って言う力を使うの。そして魔導具って言うのは精神力を使うのよ。）

（それがどうしたんだ？いくらなんでも使えない魔法を使おうとはしないだろ？）

（もうっ、ココからが重要なのよ。この魔法力と精神力はとても似通ったものなの。

だから片方が少なくなっている時にもう片方を使おうとすると身体が受け付けないのよ・・・。

まあ、貴方の場合はこちらも並外れた量があるみたいだからあまり気にしなくてもいいけど。）

（ふうくん、なるほどね。じゃあ普通魔法と魔導具の両方を使う者は少ないのか？）

（物分りがいいわね、その通りよ。基本的には魔導具は近接武具が多いからそうなるのかも知れないけど。）

（ってことは俺も魔法が使えるのか？）

（ええ、使えるわ。でも私を使えばどんなほぼどんな現象でも起こせるから必要ないと思うけど？）

（でもさ、光華が第零級なら秘密にしとく方がいいだろう？）

（ふうくん、確かに。じゃあ、私が教えたげよっか？）

（・・・教えられるんだろうな？）

（当然じゃないっ！失礼なこと言わないでよ。）

（そうか、じゃあ頼むよ。）

（分かったわ、じゃあ初めに・・・）

・
・
・

翔が光華と話をしている頃・・・

「ふうくん・・・。」

一人の少女、いや正確には一人の美少女が夕日の光に包まれながら横になっていた。

1時間前までは魔法力と精神力に耐え切れずにうなされていたのだが、今は静かに眠りに落ちていた・・・。

それからさらに1時間後・・・

「ううゝん・・・、ここは？」

自分の部屋でこう言う少女の姿はどこか滑稽であったが、ここに少女以外の人間は居ないので深く追求しないでおこう。

「???」

少女は場所よりも自分の格好のほうが気になったようである。

ちなみに少女は倒れる前薄いシャツの上に上着を着、下に丈の長いスカートを履いていたはず・・・。

しかし今は上のシャツだけなのである。

(・・・どうということ?)

どれだけ考えても答えはでないのだった・・・。

・
・
・

場所は変わって居間・・・

（なるほどね，なんとなくだけど分かったよ。）

（やっぱり才能があるみたいね。飲み込みが速いわ。）

（あはは，ありがと。じゃあ試してみようか。）

（それもいいけど，あの娘が起きたみたいよ？）

（なに，そうか。じゃあ連れて来ようかな。）

そういつて翔は少女の部屋への階段を上っていくのだった・・・。

・ ・ ・

コンッコンッ

翔は少女の部屋の前で止まると扉をノックすると，

「はい，何方です？」

「あゝ，翔だ。大丈夫か？」

「翔・・・？ ああ，今出ます。」

そう言う少女は何かゴソゴソとしたかと思うと徐に扉を開けた。

「ああ、大丈夫だった？」

翔がそういうと、

「ええ、でも私どうしてここで寝てたんでしょう？」

「まあ、こんなところじゃなんだから下に降りようか。」

翔はそういうと少女は何か釈然としないようだったが素直に翔の後に着いていくのだった・・・。

・ ・ ・

第2話 『修行、そして初陣へ・・・』

第2話 『修行、そして初陣へ・・・』

・
・
・
所変わって居間・・・

「で、身体のほうは大丈夫なのか？」

翔はそういいながらそばにあった椅子へと腰掛けた。

「ええ、もう大丈夫ですよ。」

少女もそういいながら翔の向側にあるソファへと腰掛けた。

「寝ずらそうだったから上着だけ脱がせたんだが・・・、いやだったか？」

普通どんな少女でもこの問いには嫌だ、と答えるだろう。

・・・まあ、翔にその様な反応を期待してはいないのだが。

「え、ええ、まあいいです。運んでもらったみたいでごめんなさい・・・。」

「いや、魔法力を消費してすぐに俺が頼んだからこんな事になって

しまったんだからな・・・、俺のほうこそすまなかった・・・。」

「いいえ、気にしないで下さいよ、もう大丈夫ですから・・・。」

そういった少女をみて翔は何かを思いついたようである。

「あのさ、いろいろあつて聞き忘れてたけど名前聞いて無かったよな？」

「あっ！ごめんなさい！私，レナ，レナ・クリストファーって言います。レナって呼んでもらっていいですよ。」

「分かったレナだな，俺は翔，龍崎 翔だ，翔って呼んでもらっていいぞ。」

そう言う翔は徐に手を差し出した。

「あの時は助けてくれてありがとう，これも何かの縁だ，宜しく頼む。」

実際，はたから見ればかなりおかしなことを翔は言っているのだがレナと名乗った少女は気にしていないようである。

「ええ，宜しくお願いしますね。」

「ああよろしく頼む。あ，そうそう」

翔はそういいながら懷から何かを取り出すと少女へと差し出した。

「はい，『効銃』なくしたら大変だろ？意識が飛んだからって消え

るわけじゃないみたいだな。」

「あつ、ありがとうっ。」

「一つ聞きたいんだけどさ、魔導具ってそんなに貴重なの？」

その言葉を聞いた少女は目を丸くしてこう言った。

「魔導具の価値を知らないなんて変わってますね……。」

「……で、どうなの？」

「そうですね、この『効銃』でだいたい家が一軒建つぐらいですよ。」

それを聞いた翔もまた目を丸くしてこう言った。

「そ、そんなにするのか……。……その魔導具にもレベルってあるのか？」

レナは翔の言い方に少し違和感を感じながらしかし何も追求せずにかこう言った。

「ええ、ありますよ。私の魔導具でDですね。」

「何段階あるんだ？」

「A，B，C，D，Eの5段階ですよ。」

「へー、そうなんだ。あ、そうそう、俺ちょっと筋トレしたいんだ

けど場所ある？」

「筋トレ、ですか？えーと、そうですね・・・、この村の裏山なんてどうでしょう？」

翔は道場のようなところだと思っていたので少し沈黙したが、

「・・・まあ、どこでもいいや。ありがと今から行ってくるよ。」

そういうと少女の返答も聞かずに裏山へ歩いていった・・・。

・ ・ ・

第3話 『修行、そして・・・』

第3話 『修行、そして・・・。』

翔はレナに教えてもらった裏山に来ていた。

周りは木々がざわめき、太陽の光が木々の隙間から漏れている。

レナが倒れた森とは違いどこか神秘的な空間が広がっていた。

（で、どうやるんだ？）

（簡単なことよ、貴方の魔法力なら中級までなら使えるはずよ。）

（さっきレナが使っていた魔法はなんなんだ？）

（あれは初級も初級、光の初級魔法よ。）

そう聞いた翔は素直に驚き、次の疑問を投げかけた。

（あれが初級なのか？）

（ええ、体力を少量回復させることが出来るの、あと傷の手当てとかね。）

（じゃあ、俺は？）

（どのタイプの魔法が使いたい？）

翔は少し考えたようなそぶりを見せると、徐に

（そうだな、とりあえず攻撃と守り、あと補助の3つだな。）

（あはは、いきなり3つも覚えるの？）

光華の声はしかしどこか予想していたかのようにだった。

（ああ、俺は物覚えには自信があるんだ。）

（いいわ、じゃあまずは防御の中級魔法からね。私の後に続いて詠唱して。「光の精霊よ、我が命を受け、我らに仇するものを阻む光の壁を、ワイドシールド！」）

「光の精霊よ、我が命を受け、我らに仇するものを阻む光の壁を、ワイドシールド！」

そう翔が詠唱した瞬間

ピンッ！

目の前に光の壁が現れていた。

（こっこれは？）

（これが光の魔法『ワイドシールド』よ、ほとんどの魔法と物理攻撃を防ぐことが出来るわ。）

（す、すごいな・・・。）

（じゃあ、次は攻撃ね、「炎の精霊よ、その強き力を持って、我が敵を討つ力となれ、メテオストライク！」）

「炎の精霊よ、その強き力を持って、我が敵を討つ力となれ、メテオストライク！」

グオオオオツ！

そう詠唱した瞬間、翔の目の真上から大きな隕石が1つ、目の前の大木へと突き刺さった。

その木は大きな音を立てながら燃え尽きていった・・・。

（恐ろしい威力だな・・・。）

（次は補助ね、「闇の精霊よ、その意思を持って、全てを隠す力となれ、ダークロスト！」）

「闇の精霊よ、その意思を持って、全てを隠す力となれ、ダークロスト！」

そう詠唱した翔だったが、

「あれ？何もおこらない？」

（いいえ、おこっているわ、ただ貴方には分からないだけ。貴方の姿を隠す魔法だもの。）

（なるほどね，でも本当に消えてるのか？）

（信じないなら別にいいけど・・・，ああそうだ，レナとかいう娘で確認したら？）

（・・・そうだな，そうするか・・・。）

一瞬迷った翔だったが，好奇心には勝てないらしく，承諾した。

そう翔はいうとレナの家へと少し小走りになりながら歩いていくのだった・・・。

第4話 『襲撃』

第4話 『襲撃』

レナ side

（さて、翔さんも出て行ったことですし、私も練習しに行きますか。そういえば修行とか言っていましたけどいったい何をやってるのでしょうか。）

レナはそう思いながら『効銃』を呼び出す……。

（ねえ、コウ。あの人いったいなんだと思う？）

どうでもいいが『コウ』と言うのは魔導具『効銃』のことである。

言いづらいからそうしたそうだ。

（……分かりません、でもあの人が特別な印象を受けます……。

秘密があるように思うのですが……。）

（やっぱり？ なにか変なのよね。

そういえば翔さん、空間転移魔法に関心があるみたいでしたし……。）

（そうです、何故失われた魔法に関心を持つのでしょうかね。）

空間転移，ある場所からある場所へ自由に移動することの出来る魔法。

その最上級魔法『アナザーチェンジ』，今の時代で使えるものは居ないが，時空を越えることが出来る魔法である。

（分かんないね，でもコウ，貴方の例の『弾丸』を使えば空間転移も使えるんじゃない？）

（・・・ええ，確かに可能性はあります・・・。

ですがあくまで私は零級魔導具の劣化能力しか持っていないから。）

（その言い方からすると何か思い当たる節があるようね？）

（・・・あの人はもしかしたら太古に置き忘れられた魔法『アナザーチェンジ』によってこちら側に転移してきた可能性があります。）

（そんなっ！ありえないでしょ，だってもう使えるものは居ないのよ？

第一， あの人にそこまで魔法力を感じなかったわ。）

このときレナは気づいていなかったが翔のそれは自分自身の魔法力を使うのではなく，自然に満ちる精霊の力を使うものだった。

それは自分自身のそれよりも遥かに高純度で純粋なエネルギーであるため，卓越した精霊魔法使いは通常の魔法使い100人分の魔法を使えると言われている。

（あくまで可能性の話です。まあ、今のところ特に害はなさそうですが。）

（・・・ねえ、もう二度と彼を中傷するようなことは言わないで。私を特別視しないでくれた唯一の人なのよ。）

そのときレナはなんともいえない悲しそうな顔をしていたとか。

（・・・分かりました、すみません・・・。）

（もういいわ、消えて『効銃』）

そうして効銃を消したレナは裏山への道を歩いていくのだった・・・。

＼ 本ルート 〵

翔は歩いていた、村の通りを。

その目の前に一本の火柱が映る・・・。

そして逃げ惑う村人達・・・。

しばらくすると目の前に数匹のゴブリンが現れた。

「な、何があったんだ？」

翔は近くの村人にそう聞くと、

「分からないっ、突然民家が爆発したと思ったらいきなりゴブリンが入ってきたんだっ！」

村人はそういうと一目散に逃げていった。

そこへ、

「翔さんっ！」

裏山へ向かって歩いてきたレナが駆けつけてきた。

翔の近くへ近づくと、

「何があったんですかっ？」

「分からないっ、でもゴブリンが居ることは確かだっ！」

そう翔は言った。

「やいっ！ゴブリンの野郎めっ、俺たちが成敗してやるぜ！」

突如目の前で聞えた声に驚いた翔が目をやると、

翔の目の前に5人の男たちが立っていた。

「あ、ブラットさん。」

ブラットと呼ばれた男は頷きながらこういった。

「俺たちに任せて早く逃げなっ！」

「わ、分かりました！」

レナはそういうと翔の腕を引っ張りながら町の入り口のほうへ走っていった。

・
・
・

場所は変わって入り口（避難所）

「・・・なあ、あいつら誰だ？」

「ああ、あの人たちはこの村の守衛隊の人たちですよ。」

「なるほどな、でもあの人数で大丈夫か？」

説明していなかったがこのポーン村、民家が10件、酒場が1件というとても小さな村なのである。

そこまでたくさん守衛隊の隊員が居ると思えなかった。

「ええ、何とかできるでしょう。あの人数ならば。」

「・・・そうだといいたが。」

その後、討伐完了の知らせが入ったのはしばらくたってからだった。
・
・
・

第5話 『襲撃，そして事後処理』

第5話 『襲撃，そして事後処理』

1度目の襲撃から2時間後・・・

周囲はようやく収まり，それぞれの家へと入っていった。

被害は初めの民家と守衛隊の人たちが怪我をただけで済んだようである。

「まったく，びっくりしたよ・・・。こういうことってよくあることなの？」

翔が心底疲れたような口調でそう言った。

すると

「そんなわけ無いじゃないですか，こんなことまず無いですよ。」

「あ，そうなんだ。」

「ええ，・・・そういえば人が出たんですね。」

そうレナは言うど病院（とは言っても普通の家に医薬品が置いてあるだけだが）へと足をむけ，歩いていった。

翔もそれに続いていく。

（・・・なあ、これで終わりだと思うか？）

翔はこっそりと光華を出し、そう聞いた。

（多分また来ると思うわ、今度は倍以上の数を集めてね。）

（やっぱりか、どうするべきだと思う？）

（今回は4匹だったから次回は10匹ぐらいと予想できるわ。
って事は守衛隊の人たちに全員で5匹倒させて、残りを貴方とレナ
でやれば出来るはずよ。）

（つつ、守衛隊の人たちより俺たちのほうが多いのか？）

（じゃなくてもいいけど、貴方とレナは魔法が使えるから遠距離攻
撃すればいいじゃない。）

（・・・なるほど。）

そう翔は言う。翔はレナの元へと駆けていった。

・ ・ ・

レナの近くに寄るまで分からなかったが、隊員たちはかなり深手を
負っていた。

一人は腹を刺され、一人は足の肉を持っていかれていた……。

残りの3人はところどころ切り傷があったが、目立った外傷はなかった。

「……………」

レナは深手を負った隊員たちをまえに呆然と立ち尽くしていた。

「おい、速く回復呪文を！」

翔はそう言うが、

「……ダメよ、ここまで深い傷は『ヒール』じゃ気休め程度にしかないわ……。」

レナは自分の弱さに齒軋りするように言った。

その声があまりにも悲痛に聞えたのか、翔はそれ以上何も言わなかった。

（……くそっ、何かいい方法は無いのかよっ！）

そう翔は自分を叱咤したつもりだったのだが、

（あら、貴方が使えばいいじゃない。）

という思わぬ返答が返ってきた。

（おれが？無理だ，そんな魔法教わってないぞ！）

（ええ，でもやらないとこの人たちは死ぬわよ？）

（つつ，分かったよ，で，詠唱は？）

翔は何か言いかけたようだったがそれを飲み込み，そういった。

（ふふっ，じゃあいくわよ？『光の精霊よ，その神々しき力をもつて彼らに安らぎを，ワイドヒール！』）

『光の精霊よ，その神々しき力をもって彼らに安らぎを，』

突然詠唱を始めた翔にレナたちは驚いたようだったが，翔が気にするはずもなく，

『ワイドヒール！』

詠唱を終えた。

すると，

カッツッ！

あたり一面が眩い光に包まれる。

目を開けられるほどまで光が弱まった時，隊員たちの傷は跡形もなく消失していた。

「す，すごいっ！」

初めに声を上げたのは興奮した面持ちのレナだった。

使えると思っていたいなかった翔が魔法を使った，ましてや自分の使えない中級魔法を使ったのである。

レナの反応は正常と言えよう。

「「ありがとう！おかげで傷が嘘のように消えてなくなったよ！」」

まず，重傷者の2人が，そして

「「「ああ，俺たちもだ！」」」

切り傷や擦り傷が無数にあった隊員たちもそういった。

「すごいじゃないですか！魔法使えたんですね。」

「ん？・・・まあ，な。」

翔は今使えるようになった，とは言えず苦笑しながらそう言った。

・
・
・

場所は変わってレナ宅への帰り道

あの魔法を使った後，隊員の人たちにこれでもかと言うぐらいお礼の言葉を貰いながら帰路に着いていた。

「あはは、全くあの人たちはおおげさだなく、そう思わない？ レナさんは。」

「うふふ、そんなこと無いですよ、あの人たちにとっては命の恩人なんですから。」

そういわれた翔は恥ずかしげに頬を赤らめながらこう言った。

「そんなもんかな。」

「ふふっ、そんなものですよ。」

レナは翔が照れ隠しでそっけなくしていたのが分かっているようである。

「・・・でも、あの時私が魔法を使って見せなくてもよかったんじゃないですか？」

「あはは・・・，そうかもね・・・。」

翔の無責任な返答に、レナは少し頬を膨らませながら、

「そうかもね，ってそれだけのことで私は倒れたんですか！」

レナは翔の無責任な言葉にちょっと頭にきたようである。

「あゝ，そういえばそうだったね・・・，その，ごめん・・・。」

翔も自分の失態に気づいたのか，素直に謝った。

その後、魔法の話をしたり、これからどうするのかなど、他愛も無いことを話しながら帰っていった。

2人の声はどこか楽しそうだったと、その場に居合わせた村人は語る。(笑)

このとき、これから巻き起こる戦いに気づくものはまだ居なかった・・。

だが戦いは近づいている、ゆっくりと、しかし確実に・・。

第5・5話 『襲撃後の襲撃前?!』

第5・5話 『襲撃後の襲撃前?!』

前回の襲撃から2日後・・・

襲撃から2日が過ぎ、次第に落ち着きを取り戻し始めた頃、

『北東の森より多数のゴブリンの群れ確認！半日中にはポーン村へ到達せり！』

突然そう報告が入ったのだった・・・。

「翔さん！聞きましたかっ？」

レナが血相を変えて翔の所にやってきた。

「ん？ああ、聞いたよ、ゴブリンが来るみたいだな・・・。」

だというのに翔は落ち着き払った様子でそう言った。

「何を落ち着いているんですか！半日で来るらしいんです、どうしましよう？」

「どうするもこうするも、村を守るなら戦うしかないだろう？」

質問に質問で返され、レナは一瞬言葉に詰まったが、

「それはそうですけどっ、この村の防衛隊の人達じゃとてもじゃないけど無理な量ですよ、100匹なんて・・・。」

「・・・まあ、騒いでも変わることじゃないから、それに俺達が戦えばなんとかなる数字だろ。」

確かに翔の言うことは最もなのだが、残念ながら頭に血が上ったレナには諦めているように聞えたようである。

「私達が？無理に決まってるでしょう、私達の力なんてゴブリンに通じるはずが無い！」

「いや、大丈夫だ、剣とかで傷つくなら魔法でも何とかなるはずだ。いざとなれば魔導具を使えば良いしな。」

「そんな簡単に言わないで下さい、私は魔導具を隠しているんですよ？」

「だが使わないとこの戦い、負けることになるかも知れない。」

「・・・」

無言になるレナ、さすがに自分の暮らしてきた村が襲われる、しかも勝てないかもしれないと言われては即決することは出来なかった。

「・・・まっ、いざとなったら50匹ぐらいなら俺が何とかするさっ、それをする力ぐらいはあるからな。」

「?!?!?!?!」

レナは驚いた、それはもう驚いた、まさかそんなことを翔が言い出すとは思っていなかったようである。

「まっ、残り50匹はレナたちにたちが相手することになるが、な。」

「・・・分かった、わ・・・。」

レナはまだ釈然としないようだが一応納得したようにそう返事をした。

「さて、と、じゃ筋トレにでも行って来ますかね。」

そういつて翔は裏山へと消えていった・・・。

それから半日、正午・・・

『ゴブリン先鋒隊、確認!』

その報告が入った時、村中に衝撃が走った。

村の人々が錯乱し、一斉に村の南西、避難所となった広場へとながれこんでいく。

「みつ、皆さん!落ち着いて下さい!」

村長と思われる男がそう叫んでいるが残念ながら全く効果が無いようだった。

その頃、守衛隊本部では・・・

「隊長！ゴブリンの奴らがやってきました！出動を！」

一人の男が本部へと駆け込んでいた。

「ああ、分かっている、今用意をしているところだ。」

落ち着き払った様子でブラットは返答をした、のだが

「何をそんな落ち着いているんだ！奴らをどうにかしないと俺たちの村は無くなるんだぞ！」

どうやら男はブラットの落ち着き払った態度が気に入らなかったようである。

まあ、普通の人間の正常な反応とも言えるのだが・・・。

「そういきり立つな、大体今見えているのは先鋒隊だろ？」

「そ、それがどうした！貴様らはこういうときのためにいるのだろ！さっさと片付けてこい！」

事実を突きつけられれば人間誰もが腹を立てるものである。

「・・・分かったよ、おい、みんな！行くぞ！」

ブラットは男を説得することを諦めた。

そこへ

「しつれいしまゝす、ブラットさんいますか？」

妙に間延びした声が本部に響き渡る。

「・・・レナ、もう少し何とかならないのか？」

声をかけた少女の横に立つ青年がそう言った。

「ん？何がです、翔さん？」

少女は意味が分からない、とでも言いたそうな顔で問いかけた。

「・・・もう良い。」

翔さんと呼ばれた青年は少女をとがめるのを諦めたようである。

そこへ

「あ、お二人さん、久しぶりだな。」

ブラットが声をかけた。

「あ、どうも。」

「こんにちは。」

2人は異口同音にそう言うと、

「私達から提案があるんです。」

第6話 『翔の作戦』

第6話 『翔の作戦』

レナの口からその言葉が出た時、翔は・・・

（・・・はあ、俺が考えたんだけどな・・・。）

と、最もな事を考えていたとか。

「いったいどんな提案だい？」

ブラットは少し怪訝な顔をしながらそう問いかけた。

「ゴブリンの撃退方法です。」

レナははっきりとそう告げた。

「・・・ゴブリンなら私達の力で倒すことが出来るんだよ、ありがたいけど大丈夫だ。」

ブラットはそう少女に告げた、が

「ちょっと待って下さい。」

少女の横、つまり翔がそう言った。

「・・・何だい？」

「貴方の言っている『ゴブリン』と言うのは今来ている先鋒隊のことですか？それとも100匹全部のことですか？」

「・・・」

翔のその言葉にブラットは何も言えず、無言のまま翔へと目を向けた。

「・・・やっぱり、先鋒隊のことだったんですね・・・。」

翔はもともと確信を持っていたようにそう言った。

「・・・ああ、その通りだ、で？それを知っていながらの提案なのか？」

「ええ、そうです。」

翔は自信満々にそう言った。

「・・・分かった、聞こう。」

そうブラットが言った。

「分かりました、まずですね・・・」

・
・

・
長くなるので書かないが翔の作戦はこうである。

先鋒隊は約10匹、これは今まで通り正面からぶつかり倒す。

その後約100匹のゴブリンが来る前に進路へ油を撒き、先鋒隊の隊員たちは両端で待機。

ゴブリンが通ったときに油へ火をつける。

その後、残ったゴブリンに弓矢を1度射、後は白兵戦、と言う作戦である。

「なるほど、普通に戦うよりはよさそうだな。」

その作戦をきいたブラットは感嘆の意を込めてそう言った。

「この作戦、実行していただけますね？」

「ああ、分かった、協力しよう。」

翔が問いかけた、というより確認した言葉にブラットは即答した。

「・・・だが、この作戦の為には用意がある、先鋒隊を倒しては間に合わん・・・。」

「それは私達2人で先鋒隊を相手すれば解決されると思います。」

ブラットのその問いに答えたのは翔ではなくレナだった。

「なっ！それは無茶だ、君達では何も出来ない、絶対に無理だろう！」

「本当にそう思いますか？ではなぜ今まで私を恐れてきたんです？」

（？ということだ？）

レナの思いがけない、突然の言葉に翔は首を傾げた。

「・・・」

ブラットは答えない。

何か意味があるのだろうか、その顔を見てレナは捲くし立てるようになら続けた。

「私は知っていましたよ、私が魔術師だからでしょう？この力が怖いんでしょう！」

「・・・ああ、そうさ！」

ブラットはそう吐き捨て、続きにそう言った。

「・・・好きにしろ、だが・・・、必ず倒せ・・・。」

これがレナにとって、はじめての認められた言葉だったのだ・・・。

もつとも翔にそれを知る術はなかったのだが。

「じゃ、いきましよう。」

「え？」

反射的に翔はそういったが、

「先鋒隊を倒しに行くんでしょう？」

レナは全く気にせずにそういった。

「ああ・・・、そうだったな、行こうか。」

そうして2人はその場を離れていく・・・その時、

「あ、そうそう、早く用意をして追いかけて来ててくださいね。」

そうレナがブラットへ告げると2人は今度こそ外へ消えていった。

「・・・頼む・・・。」

ブラットが誰もいない空間にそう呟いていた。

そして、

「みんな！聞いてくれ！我々は先鋒隊の後に来る部隊を相手する
ことになった！」

そう言った後、翔の作戦を隊員へと話していった。

第6．5話 『レナの独白』

第6．5話 『レナの独白』

2人は道を歩く・・・。

言葉は無く、意思を示す行動も無い。

村の門をくぐる。

ある生物を殺す為・・・。

村を守る為・・・。

たとえその行動が自分のためにならなかったとしても・・・。

2人は歩く・・・。

門をくぐり、戦いやすそうな場所を見つけた2人は倒木へと腰掛け
ていた。

「あの・・・，やっぱり，驚きました？」

「・・・まあ，な。」

翔の言う『驚いた』というのはそれを自分に気づかせなかったこと
に対してである。

「・・・私も直接怖がられているって言われたことは無いんですよ・・・、でもなにかおかしいと思っていたんです・・・。」

それはレナの独白だった。

今まで過ごしてきた村の人々に畏怖や恐怖を抱かれていたことが彼女にとって重荷となっているようだった。

「まあ、気にすることじゃ無いんじゃないか？人なんて自分と違う所があれば畏怖を感じるものだからな・・・。」

レナはまさか翔にそんなことを言われると思っていなかったのだろう、心底驚いたような顔でこう言った。

「・・・そう、です、か。」

いつしかレナの声は震え、俯いていた。

「・・・まあ、俺もレナほどではないが少しは経験あるからな・・・。」

これも翔から聞くとは思っていなかったのだろう、レナはまたしても驚いたようにそう言い、

（聞くべきじゃないんでしょうけど・・・、知りたい。）

レナは好奇心に勝てなかった様にこう言った。

「・・・一体何があったんです？」

「ははは、誰にも話したく無かったんだけど・・・，レナの話も聞いたからな，教えてあげるよ。」

「自惚れるわけじゃないけど俺は結構女性に縁があってね・・・，そのことで学校中の男たちに無視された事があった。」

まあ，簡単に言うとかめられてたんだろうね，いきなり呼び出されて殴られたこともあったよ・・・。」

レナは初めて聞く翔の身の上話に興味深々な様子でその話に聞き入っていた。

「それからしばらくして，さすがに腹が立ってね・・・，ケンカしたんだよ。結果から言えば勝ったんだけど，10人全員病院送りにしちゃって・・・。」

それから畏怖と恐怖の目で見られるようになったんだ・・・。」

翔もレナと同じく独白するかのように話した。

「だけど1人だけそうしない人がいてね，今は親友なんだけどその時は全く知らなかったんだ・・・。だからレナよりはマシだったかな・・・。」

余談だが，翔の言う『そうしなかった人』というのは最近出番の無い（当然といえば当然だが）夏目 明良 である。

「・・・そうだったんですか。」

「レナにはそんな人がいなかったんだろ？俺がその友人になってやるよ。」

翔にとっては少し恥ずかしい、程度の言葉だったのだろう・・・。
しかしレナがこの言葉によってどれほど救われたか、翔は気づいていない。

「あ、ありがとうございます・・・。」

「おう。／＼／」

翔も今頃恥ずかしくなってきたようで、少し顔をレナから反らした。
なんといってもレナは特S級の美少女なのである、この反応は当然だと言えるだろう。

「さて、と、来たみたいだな。」

「あ、そうみたいですな。翔さん」

「ん？」

「ありがとうございます♪」

「あはは、いいよ。あ、じゃあさ、1つ手伝ってくれる？」

「いいですよ」

レナは即答した、自分の『友達が欲しい』という願いがかなったのだから翔の願いも聞かなくては不公平だと思ったのだろう。

「あはは、内容を聞かなくてもいいのかい？」

「ふふふ、大丈夫です。」

「そっか、じゃ、とりあえずこいつらを倒さないかね。」

翔はそういうとゴブリンの群れへと身体を向けたのだった・・・。

第7話 『もう一つの魔道具』

第7話 『もう一つの魔道具』

「えっ！」

「なにっ！」

丘の上からゴブリンを見た2人は驚愕の声を上げた。

丘の奥に広がる高原には約50頭のゴブリンが2人へ向かって歩いていた。

「ど、どういうことだ？」

「さあ？ ちょっと私には・・・。」

「いやいや、そうじゃなくって。」

レナの言葉どおりの反応に翔は少し呆れながら、

「読みが外れたみたいだな・・・。」

と続けた。

「そうみたいですわ、どうします？」

「あ、あのさ」

突然の言葉にレナは少し音程の外れた声でこう言った。

「はい？」

「敬語止めない？」

「え、でも……。」

何故か止めようとしないうちにレナに翔は少し強引に言うことを聞かせることにしたようである。

「いいじゃん、友人ならそれぐらい当然だって。」

翔の言葉にレナは渋々頷いた。

「でも、まずこのゴブリン達をどうするか決めないといけないんじゃないですか？」

「レナ、また敬語になってるぞ。」

「あつ、すみません。」

「まただな。（笑）」

／／／

レナは恥ずかしくて声が出ないようである。

翔はそのことに気づかないようなフリをしてこう続けた。

「さてと、どうすると言われても倒すしかないだろう？」

「え？あ、はいそうですね。」

また敬語になっているのだが翔はあえて言わないことにしたようである。

それを言えばまた赤くなってしまうことが分かりきっていた為、翔の判断は正しかったと言えるだろう。

（どうしたらいいと思う？）

翔は久しぶりに『光華』へと声をかけた。

（ん？戦ったらいいんじゃない？）

（いやそうなんだけどさ、この数は魔法だけじゃ難しいだろ・・・。）

確かに、元々の計画ではごく少数のゴブリンが相手だったので魔法だけでよかったのである。

これほどの数になると幾つかのゴブリンには突破されてしまう可能性がある、いや、十中八九突破されるだろう。

（仕方が無いわね・・・、『闇華』実体化したら？）

（ん？だれだ？『闇華』って？）

（前に言ったでしょ、私の名前は『聖剣と魔剣』だって）

（ああ、聞いたけど、それが？）

（私は聖剣、つまり光を司ってるの。つまり）

（その対となる闇を司る者がいるってことか・・・。）

（そういうこと♪）

（・・・いいわよ。）

（！今のがそうか？）

（そーよ、闇華、じゃ、交代ね。）

（・・・分かったわ。）

（き、君が闇華？）

（・・・そうよ、私が闇華、魔剣とも呼ばれてるわね。）

どうやら闇華は『・・・』を初めにつけるのが癖のようである。

（で？実体化するって言ってたけど？）

（・・・説明するより見たほうが楽ね。）

そう闇華が言うと、

カッ！

周囲に一瞬闇（？）のようなものが閃光のように広がる。

その闇が晴れた時、翔の右手には1本の剣が握られていた。

（・・・これが私の本体、『魔剣』よ。）

（お、重い・・・。）

その剣は50キロを超える重量があり、到底振り回すことが出来るものではなかったようである。

（・・・失礼ね。ま、仕方が無いかな。魔力を私に流しなさい。）

翔は意味が分からなかったが言われるがまま魔力を通した、すると

（なっ、これは！）

通した瞬間、今まで重かった剣が嘘のように軽くなった、そう、まるで羽毛や空気の固まりを握っているようだった。

（・・・あとは好きなように戦いなさい。）

（わ、分かった。）

無責任極まりなかったが、翔が質問する前に、

（ふふふ、なかなか様になってるわよ？）

光華に変わっていた。

（・・・そうか。）

「あのく、そろそろ始めませんか？」

今まで大人しく見守っていたレナがここで声をかけた。

「あ、ああ、分かった。っていうかこの剣、黒いな・・・。」

「そうですね、なんていう名前なんです？」

（魔剣って言うわけにはいかないよな・・・、何がいいと思う？）

（うーん、そのまま闇華でいいんじゃない？）

（そういわれればそうだな・・・。）

「ああ、これは『闇華』だ。」

「そうなんですか、って言うか魔導具持ってたんですね。」

「ああ、まあな。」

翔は完全に言ってなかったことを忘れていたが、レナは気にしていないようである。

「さて、やりますか。」

「そうですね。」

「じゃ、レナは魔法で攻撃してくれ、俺は何発か撃ったら直接攻撃するから。」

「分かりました！」

そうして2人の戦闘が開始した。

第8話 『初陣』

第8話 『初陣』

レナ side

（翔さんが虚空に向かって手のひらを向ける・・・。
これは彼独特の魔法の唱え方・・・。
とても珍しい、でも私の好きな唱え方・・・。）

翔に魔法を唱えるように言われたレナだったが呆然と翔の方を見ながらそんなことを考えていた。
確かにこの世界では目標に手を向けながら魔法を唱える魔術師はいない。

手を向けることによって攻撃範囲が制限されるからだ。
実際、翔はゲームやマンガの真似をしているだけなのだが当然、レナはその事実を知らない。

「おい、レナ！早く唱えろ！」

レナの様子に気づいたのか、翔がレナにそう言った。

「は、はい！」

自分の失態に気づいたレナが、少し顔を赤くしながらそう答えた。
翔は少し怪訝な様子でレナを見たが、すぐに気を取り直したようだった。

（と、とりあえず何か唱えないと！）

「炎の精霊よ、その力をもって、我が敵を討て！」

レナは自分が混乱していることを感じながら、しかししっかりと詠唱を終えた。

ファイヤーボール！

レナの詠唱によって無数の火の玉がゴブリン達に襲いかかった・・・。

その様子はどこか

く 本ルート く

レナが1度目の詠唱を始めた時、

（いったい何があったんだろうな・・・。）

翔はこんな時にそんなことを考えていたとか。

全くといって良いほど緊張感を持っていない翔だった。

（さて、と。始めるか。）

翔はそう考えると、2度目の詠唱へと移ったのだった。

「大気に満ちあふれる数多の精霊達よ！寄り集まりて神の力となり、彼の者を撃て！」

ライトニングストーム！

雷系中級魔法，「ライトニングストーム」その威力の強さから使えるものが少ないとされている魔法である。

無数の光の筋がゴブリンたちを襲う。

（ねえ，せっかく闇華があるんだから使ってみたら？）

（ん？・・・ああ，そうだな。）

そう光華と会話を交すと，翔は詠唱を止め一番大きな群れへと斬り込んで行った・・・。

レナ side

ズガアーンッ！

また私の放った無数の火球が，周囲の酸素を巻き込みながらゴブリンの群れへと突っ込んだ。

もうこれで5発目・・・。

初め約50匹いたゴブリン達もその半数へと数を減らしていた。

「あつ，そろそろ限界かも・・・。」

私にも欠点はある・・・。

確かに魔法を使うことは出来るが、魔法力は決して多いほうではないのである。

私はそんなことを考えながら翔さんの方へと視線を巡らせた。

龍崎 翔 と名乗った青年は今も中級魔法を連発している。

『中級魔法』・・・それは名前こそ『中級』とされているが、その魔法は実際物理攻撃魔法の中では最高ランクの威力を誇る。

上級と呼ばれるそれは、ほとんどが神話の中で神々が使ったとされる魔法の事を指す・・・。

つまり今翔さんが使っている魔法は、本来なら連発することなど到底不可能な代物だということに他ならない。

しかし翔さんは何の苦もなさそうにそれを連発している・・・。
恥ずかしながら翔さんよりも私のほうが先に魔法力が底をつくことになりそうだった・・・。

） 本ルート ）

（・・・後20匹前後か、このままでも何とかならない数字ではないな。）

翔は自分の魔法量とレナの魔法量に対して大きな差は無いと考えていた。

実際はとんでもない話である。

魔導具の与える恩恵に『魔力』があるのは前に説明したと思う。

しかし、実際にいくつもの確認例がある『第3級魔導具』と今まで1つしか確認されていない（翔を入れれば2つ目であるが）『第零級魔導具』との魔力の差が同じなわけが無いのである。

しかし翔はその知識をもっているはずがない。

だからこそこのような思い込みをしているのだろうか・・・。

(・・・ねえ，翔)

(!?!?・・・ん?)

突然の闇華の問いかけに翔は一瞬驚いた表情を見せたが，すぐに聞き返した。

(・・・あの娘，魔力が尽きかけてる。)

(!?!?!なっ，なんだって!?!?)

(・・・だから，魔力が尽きかけてる，魔法の使いすぎで。)

これには翔も驚きを隠せない。

自分は大丈夫なのに何故？

という疑問が頭の中にあることだろう。

(っそ，そういえば・・・，前に『光華』に言われた覚えがある・・・。)

魔法はね，魔法力って言う力を使うの。そして魔導具って言うのは精神力を使うのよ。

まあ，貴方の場合はこちらも並外れた量があるみたいだからあまり気にしなくてもいいけど。

(・・・思い出した?)

(ああ・・・，思い出した。だがそうだとするともうレナは戦闘に

は参加できないな・・・。

（・・・何か心配なことでも？）

（いや、どうやってこいつらを倒そうかと考えてるんだ。）

（・・・私を使ったらいいでしょう？この程度の敵、一瞬で殲滅できるわよ。）

（マジッ？まだ20匹ぐらい残ってるぜ？）

（・・・貴方は私を馬鹿にしてるの？何故私が『魔剣』と呼ばれるのか見せてあげるわ。）

何故か闇華はやる気満々のようだった。

（・・・分かった、じゃあ頼むよ。）

実際闇華を振るうのは翔本人なので、はたから見るとかなり滑稽なものがあるのだが、翔自身は気づいていない。まったく、残念なことである。

「翔さん！もう魔法力が・・・。」

ちょうどその時、レナが自身の限界を嘆くように翔へとそう告げた。その表情には不安と、申し訳なさが同居しているようだった。

「分かった、じゃあレナは休憩していてくれ。俺が奴らを殲滅する。」

「え？で、でも・・・」

「じゃ、あとはゆっくり休んでいなよ！」

レナが何かを言おうとしていたが翔はそれにかまわず、ゴブリンの群れへと駆けていった・・・。

第9話 『魔剣 〵 闇華 〵 の力』

第9話 『魔剣 〵 闇華 〵 の力』

翔は駆ける、無数のゴブリンへと向かって。

それは人間の常識を超えた速度。

しかしゴブリン達は驚きもせず逃げもせず、翔へと歩を進めていくのだった・・・。

（・・・あのさ）

ゴブリンとの距離が100メートルをきったその時、翔が闇華へと声を掛けた。

（・・・ん？）

（正直20体前後のゴブリンを俺一人で倒せると思うか？）

正直な所、翔はレナにああ言ったものの自分の力でその全てを倒せるのか、不安で仕方が無かったのだった。

ついさっきまで普通の高校生をしていた翔にとって、当然の反応であるといえば当然なのだが。

（・・・貴方が途轍もないミスをしない限り楽に勝てる相手。）

翔の本音はしかしすぐさま闇華に一蹴された。

（何故そう言いきれる？）

（・・・いい？私は魔導具，それも第零級の。そんな私を持つ者がたった20体のゴブリンにやられるわけが無い。）

ゴブリンとの距離，50メートル。

（・・・）

翔はそう断言され，次の言葉を失ったようである。
大人しくゴブリンへと向かって駆けて行った。

・
・
・

（・・・で，どうするんだ？）

ゴブリンの群の前へ立ちはだかると，翔は面倒くさそうな口調でそう言った。

（・・・好きなようにやったらいい，って言うかこの群に向かって私を振ればことは足りると思う。）

闇華言葉に翔は怪訝な顔でこう言った。

（・・・どういうことだ？）

（・・・やってみたらわかる，振る前にこう唱えて『起刃』と。）

「・・・『起刃』」

翔が怪訝な様子でそう唱えたその時！

ブ、ブウウウン

翔が持つその身長程もある大剣が薄く光りだした。

その光はきれいな、幻想的なものののだが、何故か見るものを不安にするのだった・・・。

「こ、これは？」

翔は闇華の突然の変化に驚いたようで、声に出してそう言った。

もつとも、それを不審に思う者はこの場には居ないのだが・・・。

ゴブリンたちにとって人間は破壊する、いや、殺す対象でしかないのだろう、翔のその様子を見ても全身をやめる事は無かった。

（・・・いいから振りなさい、それで全てが分かる。）

（・・・分かったよ。）

翔はどこか釈然としない様子だったが、いわれた通り、大剣に力を込めるのだった。

・・・もつとも力とは『魔法力』のことなのだが。

「いくぞ！」

翔はその大剣を両手で構え、ゴブリンではなく、自分自身に言い聞かせるかのようにそう言った。

その大剣の光は構えることにより、次第に眩い光へと変わっていつ

た。

「はあああああ！」

ズッガッアアアアン！

翔がその大剣を横薙ぎに振るった瞬間！

信じられないような地響きとともに地面が割れ、空気が揺れた。辺りには土埃が舞い、1メートル先も目視できない程だった。

「・・・・・・・・」

そんな中、たった一人驚愕の表情でたっている者がいた……。この現象を起こした張本人、龍崎 翔 である。

とはいっても翔本人、その現象に驚きを隠せないようだったが。

「・・・・・・・・いたいなんなんだ、この破壊力は・・・・。」

（・・・・・・・・だから言ったでしょう、私の力なら一瞬で片付くと。）

「いったい何なんだ？あの破壊力、地形が変わっちまったじゃないか。」

と翔は一部の外れた事を言い、しかし表情は真剣そのものでこう言った。

「あの光はなんなんだ？」

・ ・

・
レナ side

翔さんに此処に居ろって言われてしまいました・・・。

その気持ちは嬉しいんですけど、大丈夫でしょうか？

あの数を一人で相手にするのは王国の騎士でも難しいはずですよ。
出来たとしても必ず長期戦になる・・・。

（・・・仕方があるまい・・・、レナに出来るのはここまでだ。）

わっ、びっくりしました、だって『効銃（補助）』（以下『補』）から話し掛けられることなんて今までほとんど無かったもので・・・。

（レナはまさかあの男を信じておらぬのか？）

（そ、そんなこと無いにきまつてるでしょう！）

そんなこと絶対にありません・・・。

私は信じています。

（ならば心配などしなくてもいい、奴は出来ると言った、それを信じよ・・・。）

（・・・そうですね。）

そんなこと、私も分かってるんです・・・。
でも、翔さんが頑張ってるのに私だけ休んでるなんて・・・、自分

の無力さが嫌になります・・・。

（大丈夫だ、それに奴の魔導具は・・・，否，これは言う必要は無い，か・・・。）

？

『補』がこんな歯切れの悪い言い方をするなんて・・・，何があったんでしょうか？

（ね，『攻』に変わってくれませんか？）

あ，ちなみに今しゃべってるのは『補』ね，彼は補助系の力を持つてるの。

『攻』って言うのは攻撃系の力を持つてるの。

『攻』は少し前にも出てきましたよね。

（・・・言いづらいんだがの・・・，今寝ておるみたいじゃ・・・。）

・・・まさか寝ているとは思いませんでした。
ではこの質問はまた今度にしましょう。

（有難うございます，ここで待つことにします。）

そう言うのと，頭の中に在った『補』の意識が消えていくのが分かった。

そのときである。

ズッガッアアアアアン！

翔さんのいた所で大きな音とともに岩が突き出てきました。

いったいなんなんでしょう？

それよりも、翔さんは大丈夫なんでしょうか？

結局私は居てもたっても居られず、翔さんの居る所・・・、正確には居た所付近へと掛けていくのだった・・・。

第10話 『戦後の一騒動!?!』

第10話 『戦後の一騒動?』

魔剣 『闇華』

第零級魔導具であり闇を司る者でもある。

俺は今まで『光』とは希望であり未来であり善であると考えてきた・
・・。

しかし今、俺のその考えが音を立てて粉々に散っている。

そうなる原因を作ったのは自分の手に握られた大剣に他ならない。

・ ・ ・

ある高原でのある一場面、ゴブリンたちに向かって大剣を振るう少年の姿。

その瞬間、地面が割れ、大気が揺れる。

まるで親の敵のような音を立てながら大剣から発せられた衝撃波は進行上にある全てを飲み込む・・・。

砕け散るゴブリンの刀の破片、飛び散る血、しかしその全ては一瞬で消え去り、後に残るのは巻き起こった粉塵だけだった・・・。

その威力は凄まじく、翔のいた周辺の全てのものを飲み込み、その場を荒野へと変えてしまっていたのである。

「・・・疲れたぞ。」

開口一番翔は誰に言うわけでもなくそう呟いた。意識していったわけではなく、自然と出た類の呟きだ。当然誰かからの返答を期待していた訳ではない。しかし、

（全く、派手にやったわね。）

突然翔の頭の中で声が響く。

翔は思いがけない時に声を掛けられて、驚いたようだった。今のは右手で持っている『闇華』の声ではなく、光の側の『光華』である。

しかしその内容は翔の呟きに対しての反応ではなく、ただ自分の感想を口にしただけのようだった。

返答ではないので翔の期待を裏切ったとは言えないのかも知れないが、残念なことに翔にとっては些細なことに過ぎなかったらしい。

「・・・言われてみればそうだな。」

気を取り直して翔は『光華』の言葉に賛同する。

確かに辺りを荒野に変えてしまったのだから、決して大人しいわけではないだろう。

しかし、この場にいた全てのモノを吹き飛ばし、消滅させてしまったので、『派手』というには静か過ぎたが。

差し詰め、『静かなる沈黙』と言う言葉が似合いそうである。または『静かなる大地』と言った所か。

（あはは、でも闇華にしては良く抑えたほうだと思うけどね。）前にこういう事があった時は周囲50メートルぐらいは吹き飛んだからね。

ま、それでも抑えていたんだろうけど。」

翔は光華の言った事に顔を青ざめさせながら立ち上がり、こう言った。

「・・・そういえばレナは無事か？」

（ええ、あそこにいるわ。

規模が比較的小さかったから被害は及んでないはずだけど。）

「・・・そうか、それは良かった。」

それを聞いた翔は一つため息をつく、またそばにあった（正確にはそばに出てきた）岩へと腰を下ろした。
そのときである。

「翔さくん、大丈夫ですか？」

何処からかレナの声があたりに響いた。

それは本当に小さな音のようにしか聞えなかったがやがて大きくなっていき最後には翔の頭上、つまりは岩の上から聞えるようになった。

「ん？」

翔はとっさに声のするほうを向こうとした。

しかしそこにはレナの姿は無く悠然と聳え立つ崖。

当然ながらその崖（？）は翔の身長よりも高いわけで、翔はその上を見ようにも見ることが出来なかった。

もっとも、声の主は分かっているので然程急いで確認しなくてはな

らないわけではなかったのだが。

「・・・ダメ，此処からじゃ分からない・・・。
下に行かないと。」

翔に知るすべは無いが，このときレナは崖の上で今にも泣き出しそうな顔をしていたとか。

「・・・もしかして，もしかする？」

レナの小さな呟きに近い声はしかし翔へとしっかりと届いていた。
このとき翔の脳裏にいやな予感が走る。

（あはは，飛び降りるつもりかもね。）

（・・・洒落になってねーよ！）

そうは思いながらも翔は動けないでいたのだった。

「仕方が無い。

白き風よ，我が力を増幅，強化せよ！

『ホワイトウインド』！」

そうこうしているうちにレナはある魔法を唱え終わる。

魔法の名は『ホワイトウインド』

光の力で自分の身体能力を爆発的に高める魔法で，主に戦士が戦闘用に用いる魔法である。

この場合は脚力を強化し，着地の衝撃に備えたのだろう。

確かに，飛行の魔法を唱えるよりもこちらの方が簡単で速いのだが，
一つ問題がある。

この魔法は飛行の魔法とは違い、術者自身が速度を変えることが出来ない。

つまり、重力に逆らうことが出来ない為、どうしても増したに落ちてしまうのである。

もしこのとき翔が真下に居ることをレナが知っていたなら、こんな魔法を選ぶことは無かっただろう。

「！や、ヤバイ！」

（あはは、面白くなってきたね）。
でも避けないとかなり痛いわよ？）

『光華』のありがたいお言葉に一瞬殺意を覚えたが、すぐに時間が無いことを思い出した。

もともと翔は対応速度が尋常ではない。
すぐに回避行動を取ろうとするのだが・・・。

「つぐ・・・。」

さすがに時と場合がある。

翔は飛びのこうとしたのだがあれほどの大技を使ったのである。
身体にダメージが残り足がまともに動かない。

（あらら、どうするの？）

このままじゃ激突だよ？）

『光華』は翔を茶化すように、場に合わぬ声でそう言い放った。

それは翔にとって死刑宣告と同意義であったのだが、もちろん『光華』にその気は無い。

ほんのいたずら心が働いた結果だった。

「つく、このままじゃマズイ！
・・・仕方が無い、受け止めるか。」

そう翔は言うのと徐に詠唱を始めた。

そうは言っても翔の知る魔法ではどうすることも出来ない。

いや、自分が助かる方法はいくつもある。

しかしそれではレナが助かる見込みは全く無かった。

しかし翔がその詠唱をやめることは無かった。

「『ホワイトウインド』！」

そう、翔の唱えた魔法とはレナの使った魔法と全く同じものだった。身体強化魔法『ホワイトウインド』、翔が唱えたそれは短縮詠法と言いい、ある一定の魔力の流れを利用することで詠唱をほとんど短縮するものである。

これを使うには赤龍士以上の技術が必要と言われている。

赤龍士、この世界の称号のことであり、国王が与えることのできる称号の中の最高位の称号である。

国の偉業を成し遂げた者に国王が与え、各国に1人ずつ、即ち6人の赤龍士がいる。

何故そんな高度な技術を翔が使うことが出来たのだろうか？

答えは簡単、「出来そうだったから」である。

実際は、第零級魔導具の所有者はそれが出来るようになるのだが、その事実を翔は知らない。

「よし、これで準備オッケー。」

実は脚力だけの強化ではこの高さを飛ぶことは出来ない。
その事実をレナは知らないのだった。

レナのその無邪気な言葉は翔にとって悪魔の呟きに聞えたことだろう。

「えいっ！」

そう掛け声（？）を掛けてから、レナは崖から飛び降りた。レナの体はそのまま重力に従いながら崖下へと落ちていく。つまりは翔の上へと・・・。

翔は動かない身体を無理やり動かし、レナの軌道を見やる。ほぼ垂直に落下してくるレナはしかし地面に着地することは無かった。

ドスンッ！

そんな音が聞えた次の瞬間！

レナの体は翔によってしっかりと受け止められていた。

少しの間、レナは何が起こったのか理解できないようだったが、

「キヤッ！」

という小さな悲鳴を上げて翔の顔を見上げる。

受け止めたのだから当然なのだが、俗に言うお姫様抱っこ（？）と言う形である。（笑）

すぐに顔を真っ赤にして体を暴れさせる。

当然、今の翔にそれを支えられる力などある筈も無く、2人は纏れながら翔の所為によって荒野と化した場へと倒れていった。

「・・・、もうやだ・・・。」

何でそこで暴れるんだよ・・・。」

翔は倒れながらそう呟いた。

翔には倒れる瞬間がスローモーションで見ることが出来た。

おそらく先程の名残だろう。

ふとレナを見た時、レナは硬く目を瞑り、頬を朱に染めていた。身体が地面にぶつかる。

「す、すみません……。」

レナが申し訳なさそうにそう言う。

おそらく先程の翔の呟きに対しての謝罪だろう。

翔自身自然と出た言葉だったので気にしているつもりは無かったようである。

……その呟きが本心であることに変わりは無かったが。

「……あぁいいよ。」

と答えた所であることを思い出した。

「!そうだった!」

「ど、どうしたんですか?」

レナがびっくりしたように聞き返す。

翔はすぐさま立ち上がったが、激痛が走ったのだろう、すぐに又座りなおす。

「……まだ50体残ってるだろう?」

レナははじめ意味が分からないように首を傾げる。

「ゴブリンの本隊が！」

そういわれて初めて思い出したような表情を見せた。
確かにその通りである。

あくまで先程倒したのは先鋒隊、本隊が残っているはずである。

「でもこの状態じゃいけないと思いますよ？」

慌てて戻ろうとするかと思いきや、レナは急に冷静になりそうだった。

「だからと言って何もしなくていいと言うことは無いだろ？」

翔も負けじと言い返す。

「・・・じゃあこうしましょう、とりあえず貴方の回復をしてから戻るって言うことで。」

「・・・分かった。」

その後、レナに回復魔法を掛けてもらった翔は2人でポーン村へと歩いていった。

第11話 『村への道程』

第11話 『村への道程』

ポーン村郊外の草原，そこを2人の人間が歩いていた。
当然ながら翔とレナである。

「・・・そういえばさっきのゴブリン，50体ぐらい居たよな。」

翔は思い出したかのようにそう言った。

「ええ，確かそうだったと思いますけど？」

レナは別段疑問も持たずにそう言った。

「・・・確かゴブリンの全体は50～60だったよな？
なら村を襲っているゴブリン達はせいぜい10体って事にならない
か？」

確かにその通りである。

本来翔たちは先鋒隊，即ち20体前後のゴブリンたちを相手にする
はずだったのである。

村を襲っているのが本当に10体程度なら，然程脅威ではない。
・・・尤も，全体が60体だったとしての話だが。

「確かにそうですね・・・，でもあの村の人たちで10体のゴブリン
を相手に出来るでしょうか？」

これまた正論である。

ポーン村はお世辞にも大きな村だとは言えない。

民家が10棟に酒場、集会所、警備隊詰所の13の建物から成っている。

しかしこの『警備隊詰所』は警備員3人の小さなものなのだ、とても10体のゴブリンを相手に出来るとは思えない。

世間一般には『ゴブリンは弱い』という認識が広まっているがこれは間違いである。

確かに翔やレナのような力を持つ者にとって、ゴブリンは脅威ではない。

しかし一般の人間に、ゴブリンを倒す力はない。

・・・つまりはそういう事である。

「・・・難しい、だろうな。」

翔もまた、それを感じていたようである。

少し危機感を含んだ声でそう言った。

「急ぎましょう！」

レナが勢い良くそう言う、が・・・

「悪いな、身体が言うことを聞かない・・・。

歩くだけで精一杯だ。」

当然といえば当然である、抑えてあったとはいえ、初めて闇華の『力』を使ったのである。

しかもその後には身体能力の強化、魔法の連発などを行ったのである。動かないのは当然といえた、いや、歩けること自体可笑しいとも言

える。

「そっ，そんなっ！」

レナが悲壮感漂う表情でそう言った。

「先に行ってくれ・・・，レナなら10体ぐらい大丈夫だろう？」

そう翔が言う。

笑おうと努力しているようだったが，口元が笑っていない。
相当辛いようである。

「・・・分かりました，すぐに迎えに来ますから！」

レナは自分のために翔が強がっていることに気づいたのだろう，なきそうになりながらもそう言った。

返答を待たずにレナは村へと駆けていく。

それを見送る翔の表情は，心底安心したかのように穏やかだった・・・。

『へえ，嘘までついて先に行かせるんだ。』

翔の頭の中に『光華』の声が響く。

見ると翔の顔はレナと話していた時とは比べ物にならないほど落ち着いていた。

額を伝っていた汗は完全に引き，顔色も良くなっている。

あの時はただ回復の流れを止めていただけだったようである。

「・・・まあ，な。この戦いはレナが終わらせないといけないんだよ。」

あの時の町の人間の表情，見ただろ？」

翔は周りに人が居ないからだろうか？
声に出してそういった。

『まゝね，間違っでは居ないと思うよ？翔の出した答えは。』

翔の真剣な話を，『光華』軽い口調でそうさえぎった。
そして自分の仕事は終わったとでも言いたげに，

『さゝて，今日はおしまい！』

明るくそう言ったかと思うと，翔とのコンタクトを終了したのである。

「・・・なるようになるだろう。」

翔は半分投げやりにそういいながら，ポーン村への道程をゆつくりと歩いていった

第12話 『衝撃』

第12話 『衝撃』

レナは走る、ただひたすらに村を目指して・・・。
初めて己に与えられた命を果たしに。

・ ・ ・

『ポーン村広場』

そこには村人総勢30余名が集まっていた。
村の出入り口へ走る者、広場の真ん中で立ち尽くす者、寄り添いながら泣きあう者・・・。
村人達の反応は多種多様であったが一つ、共通しているものがあった

た。

その名も『恐怖』

村人達の表情には濃い恐怖の色が見えた。

「なんだってこんな事になったんだ！」

突然1人の村人がそう叫んだ。

この世界に住んでいる以上、魔物に襲われる可能性が無いわけではない。

しかし自分にその恐怖が降りかかるとは思ってもいなかったのだらう。

その男の表情は酷く狼狽しているようだった。

そしてそれは伝染する……。

「そうよ、何故私達がこんな目にあわなくちゃいけないの？」

まず一人の人間に伝染する……。

「そうだそうだ！ 守衛隊の人間は何をやっているんだ！」

そしてまた一人……。

そしてその責任は守衛隊へと押し付けられる……。

「貴様らは我々の税金で給料を貰っているんだろう！
ちゃんと給料に見合う仕事をしろ！」

「そうだそうだ！」

「そうよ！」

「「「つな……。」「」」

守衛隊の人間は絶句した。

自分達に出来ることはあくまで村の守衛である。

まさか魔物の討伐を仕事としてやれといわれるとは思っていなかったことだろう……。

その時、

『ツクツクツクツク、コノヨウナコトニナッタ原因ヲ教エテヤロウカ？』

何処からとも無く不気味な声が辺りに響く……。

広場の中央から少し離れたあたりの空間が歪む。

一瞬間が奔った次の瞬間、村人達の目前に1人の男が佇んでいた。

顔には黒と赤の線が走り、漆黒の衣を身に纏う、いわゆる魔族。

魔族、それはこの地が世に生まれた時より以前から存在する生物といわれている。

いや、『生物』と言うには語弊があるかも知れない。

人には無い力を持ち、この『エクラス』の世界と異なる世界よりや

って来た『者』である。

……もっともこの定義では翔まで魔族と言うことになるが。その『魔族』の存在があたりの空気を禍々しいものへと変化させていく……。

「コノ村ニ我ラニ齒向カツタ者ガ居ル」

男は言った。

「女ダ、名前ハ『レナ』。我ラガ王ヲ倒滅シタ者ノ子孫……」

その瞬間、辺りを覆っていた空気が、空間が変化した。

すべての者を呪い殺すような圧倒的な瘴気の渦が男より発せられ、息をするのも不可能なほど濃密になった。

「ぐっ、き、貴様……、何を……」

村人の1人がそう言った。

村人の顔は今にも倒れそうなほど青白くなり、逃げ場を求めるように手を宙に彷徨わせた。

「要求ハ簡単、『レナ』ト言ウ女を私ノ所へ連レテ来イ、

サモナクバ先ホドノモンスターノ再来ガ起コルダロウ・・・。」

男はそう言々と漆黒の衣をはためかせながら闇へと消えていった・・・。

・

・

・

レナは走る、常人では到底追いつけない速さで・・・。

目の前には無数のゴブリン、予想以上の数が集まっていた。

ゴブリン達は今にも村へ襲い掛かりそうな勢いで歩を進める・・・。

「つく、なんてこと・・・。」

レナは一人悪態をつきながら、それでも前へと全力で走り続ける。

目前に迫ったゴブリンへと魔法を一発。

大きな火球は2体のゴブリンを巻き添えに一本の大木をなぎ倒した。

大木はゴブリンの行く手を阻む、つまりは即席のバリケードである。

「レナッ！」

「「レナさんっ！」」

村の入り口付近、守衛隊の3人がレナの名を叫んだ。

三人の顔は『畏怖』、そして『申し訳なさ』が同居したような複雑な表情をしていた。

レナは思わず首を傾げた、『畏怖』ならともかく何故『申し訳なさ』なのだろうか？、と。

レナがそう考えた時、

「・・・今すぐ、ここから逃げろ。」

ブラッドが言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9305e/>

エクラス～時空の転移者と冥王の倒滅～

2010年10月10日04時25分発行